

---

# 僕の願いはひとつだけ

デュラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の願いはひとつだけ

### 【Nコード】

N8257J

### 【作者名】

デュラ

### 【あらすじ】

僕は夢の世界で魔王を倒せと言われた。魔王を倒すと願い事をひとつだけ叶えてくれるらしい。僕は魔王を倒すための旅に半分強制的に出かけることとなった。

## 第1章：ゲーム設定

「さて、人間。我と『ゲーむ』なるものをしよう」  
「……ゲーム？」

とても曖昧な言葉だった。

一体何のゲームとなのか。

何がしたいのか、何を僕に望むのか。

そして、それは言葉だけじゃなかった。

話相手の顔や姿も見えなければ、周りの風景もまた曖昧。

そうして気付く。

（ううん？ これは、夢……？）

そう、夢。

でもそのくせ、リアルに物を考える事を奇妙に感じるけど、気のせい？

目を覚ますと夢の内容を覚えてないように、この夢もまた忘れるのかな？

「夢か……そう捕らえても構わん。確かにお前の夢を介しているが……まあ、人間の認識など所詮曖昧なもの。ただ己を納得させる理由が欲しいだけであらう？」

そう言つて、クツクツと笑う何か。

僕を人と呼ぶからには人意外の何かのはず。

……… とってもメルヘンな考え方だ。  
ちよつと自己嫌悪。

まさか、これがゲーム脳！？

……どうせ、夢なら深く考えるのはよそう。  
もっと前向きに考えよう。  
ゲーム……面白そうじゃないか。

「……いいよ。それで、僕は一体どんなゲームをすれば良いの？」  
「面白いな人間。理由を求めていたと思ったら、その矢先に逃避か？」

またクツクツと笑う『何か』。  
逃避？ 何の事が分からない。  
こちらに伝える気の無い自己完結ぎみの話されると、こっちもムツとする。

「すまぬすまぬ。我は説明に向かぬゆえ、詳しくはこいつに聞いてくれ。では、またな」  
「ちよっと、待って！ こいつって誰!？」

自分以外を認識するのも難しいこの世界で、どうやって探せばいいのか。

しかし、既に『何か』は消え去ってしまったようで返事はない。  
こいつつと言っていたから、そう遠くではないと信じたいけど。  
取り合えず、当てずっぽうに探し回るってみる？  
そう思っただけ歩き始めようとした。  
すると、

「それでは、どこからご説明致しましょうか？」  
「うわっ！」

突然、そんな声が後ろから聞こえてきた。  
慌てて振り返るも、そこに姿はない。

でも、声は確かに聞こえた。  
ということはそのに誰かが居る……もしくは、居たということ。

「誰？ どこにいるの？」

「その質問には答えかねます。第一の質問ですが、私にはあなた方の考える固有名詞も一般名詞も御座いませぬ。第二の質問ですが、やはりあなた方の感覚では捕らえられず、しいて言うならば……後ろ、でしょうか？」

応える声は即答。

そして、彼女？ が言うようにその声は後ろから聞こえて来た。  
僕は背後を向き質問する。

「えっと、それで僕は一体何をすれば良いの？」

「それは初めにすべき事でしょうか？ 過程の事でしょうか？ 最終目標の事でしょうか？」

やはり、その声は後ろから聞こえる。

過程？ 目標？

それほど声を交わしてはいないけど、ロボットみたいな人だな。

「大雑把でいいよ。詳しく説明して欲しい時はこっちから言うから。後、せめて話す時ぐらい僕の前に居て欲しいな？」

「貴方にはある世界を支配するものを倒して頂きたいのです。それと、申し訳ありませんが、私は貴方の考える『前』に行く事は出来ません。……ご説明致しましょうか？」

「うっん。言いたくないのなら別にいいよ？ （それに説明が長そうだし）」

「そうですね、お気遣い痛み入ります。そういう存在だと思って下さい」

「それで、えっと。その……ボス？　を倒せば良いんだよね。あれっ？　でも、それだと僕一人で遊ぶゲームのように思っけど？」

「いえ、一人でも出来ますが、基本的に皆さんは団体で行動しておられます」

「僕以外にも人がいるんだ？」

「はい。あなた方の世界の方は数百人ほどでしょうか」

「じゃ、その人達と一緒に攻め込めば良いの？」

「いえ、それは出来ません。……RPGと言うゲームをやった事がありますか？」

「あるよ。……つまり戦闘参加人数が決まってるってこと？」

「近いです。どちらかといえば行動人数が決まっています。……パーティー人数と言った方が分かりやすいですか？」

「どっちでも良いよ。それって何人？」

「基本的には男性なら3名まで、女性なら5名までの計8名です」

「女の子の方が一杯入るんだ？」

「はい。その分基礎能力が男性に比べて劣ります」

「そっか、じゃ……」

そんな感じで、細かい事はほとんど聞き流してしまったけど、大体分かった気がする。

後は実際にやっていった方が早いかな。

「他にご質問は御座いますか？」

「いいや、取り合えずやってみる」

「そうですか。ではくれぐれも本名を名乗る事がないように、それと魅力上げるのを忘れないで下さい。それでは、私は次の方の下に向かいますので失礼致します」

彼女？（結局、性別は分からなかった）が立ち去った気配がした後、僕の前にパネルのようなものが現れた。

中央に僕の顔が小さく出ていて、その横に数字が羅列している。数字はステータスで、貰ったポイントをそのステータスに振り分け、その上で現在の僕的能力を元に作成したステータスをプラスするらしい。

Lvはなく、ゲームがはじまれば僕の行動によって微妙にステータスが上昇するらしい。

ステータスはそれぞれ、

攻撃力

防御力

魔法力

素早さ

器用さ

魅力

の六つ。

選択肢としては、戦士系か魔法系かバランス系かな？

男性は500ポイント、女性は300ポイント。

僕は男なので500ポイントの振り分けだ。

「やっぱり、男なら戦士かな？でも、魔法で一気に敵を倒すのも良いよな。いや、ここは魔剣士みたいなカッコ良さもまた……………」  
取り合えず上から順番に100ポイントずつ振った状態で、暫くウロウロと歩きながら考えていると、地面に何か光る物を見つけた。

「何だろう？ バッチ？」

拾い上げてみると、表面には女の子の絵があり後ろは黒いバッチ  
というか、チップ？のようなものだった。

こういう感じのものは大概が可愛い女の子が描かれているけど、これは普通の女の子が描かれている。

決して可愛く無いわけじゃない。よく言えば控えめな守ってあげたくなるような感じ、悪く言えば余命宣告を受けましたみたいな感じだ。

しかも、どこかで見たことがあるような……

「あ、そっか。これだ」

僕の顔が映し出されている画面の部分とこのチップが似ている。

横に並べてみるとよく分かる。書かれている絵が違うけどその他はほとんど一緒だ。

大きさも上に重ねると……

「うわっ！ 何だ？」

チップを重ねるとチップは画面に沈んで行き、やがて完全に画面内に取り込まれてしまった。

触ってみると、画面に凹凸はなく硬い感触が返ってくる。

あちらこちら弄ってみただけで変化はなく、僕が映っていた部分はその女の子になってしまっていた。

もしかして、これが僕熟练操作するキャラになった……とか？  
だとしたらこれは凄い気落ちする。

明らかに弱そうなキャラになってしまった。

「それはないよ……はあ」

大きなため息をついてしまったのも無理はないと思う。  
スライムにすら負けそう。

設定が細かすぎて忘れてたけど、これは夢なのにリセット出来ないとか。

「これで行くしかないのか。……あれっ？」

画面を確認するとステータス振り分けポイントが300余っていた。

既に振り分けているものと合わせると800ポイント。

「……はあ。拳句の果てにバグ」

あまりにも酷すぎる。

ゲームの中身は期待できそうにないなあ。

まあ、所詮僕の夢だしね。

もう考えるのも面倒臭かったので、僕はひとつだけ一切振っていない魅力に、残りの300ポイント全部を振ってステータス変更を終えた。

その後、僕は他の設定も適当終えて最後の契約文を読み飛ばして決定を押した。

契約という文字にもう少し慎重になるべきだったかもしれないけど、夢の中だし普段もあまり読まないタイプなので、この時は全く気にしていなかった。

「……………」

決定を押しても何も画面に反応がない。

三度ため息をついた時、僕の体は浮かび上がった。

いや、その表現は正しくない。

正確には上に向かって落ちて行っただ。

でも、この表現も正しくはない。

何せ何処が上なのか下なのかも分からない。

落ちていくだけのように感じるし、前後左右に揺れている気もする。僕は気持ち悪くなって、吐いた。

吐いたはずだった。

でも、吐しゃ物はなく本当に吐いたのかも分からない。

痛みはない、苦しくない、ただ気持ち悪い。

思考はちぢれ、涙を流し、その感触を得る事もまた出来ず、僕は気を失った。

## 第2章：水面に映る女の子

「……う……うん」

頭が痛い。

僕は倒れていた体を起こした。

無理やりお酒を吞まされた次の日みたいに頭が痛い。

目覚めたばかりのせいか、目も霞んで見え難い。

フラフラと立ち上がり、木に身を預ける。

（……………木？）

後ろを見上げると、目に緑が飛び込んできた。

葉の隙間から見える空は明るい。

しかし、その光の殆どを葉が覆い隠している。

近くに川でも流れているのか、水の音も聞こえる。

（……………どこ、ここ？ ……………えっと、何があったんだっけ？）

僕は確か……………そう。

学校に行ったんだ。

それで、学校から帰る途中でアイスを買って、

田中さん家のポチと遊んで、

妹と姉ちゃんに1つずつアイスを取られて……

（そこから、どうしたっけ？）

思い出そうにも思考に霞が掛かって思い出せない。

……………ゲームをしていた……………する所？ ……だった気がする。

兎に角、意識をハッキリさせるために顔でも洗おうと、足取り怪しく僕は水の音が聞こえる方に歩き出した。  
しばらくもしない内に……というか、すぐそこに川があった。  
歩数を数えたとしても、両の手で足りるぐらいの所に川が流れていた。

綺麗な川だ。

ほとんど波打つこともなく、底の浅い川は太陽の光を反射していた。  
僕は膝を付き水に手を浸そうと、川を覗き込む。  
すると、そこに一人の女の子が映っていた。

僕は慌てて後ろを振り返る。

その拍子に僕の髪の毛が一瞬視界を塞ぐ。

(……………?)

そこには誰も居らず、人がいた気配もない。

(……………気のせい?)

首を傾げながら、もう一度水面を覗き込むと、またも女の子の姿があった。

再び後ろを振り返るも誰も居ない。

でも、2回も見ただ。

どこかに居るはず。

僕は、思い切って声に出してみた。

「……………誰? ツ!?!」

声が聞こえた。

直ぐ近くから声が聞こえた。

僕は左右を見渡す。

……………誰もいない。

「……………ねえ、誰？ どこに……………い、る……………の？」  
僕は気付いた。

自らの喉に手を当てて、

「あー」

と声を出す。

声は近くから聞こえたんじゃないで、僕がしゃべった声が耳に届いたんだ。

「……………喉を痛めた？」

でも、別に喉が痛いわけでも、喉に何かが絡んだ様子もない。触ってみても、腫れた所は全くなく。おかしな所など、どこにもなかった。

（ん？ あれっ？）

「何か……………変だ」

女の子が後ろにいてと思って僕は振り返った。

これはおかしな事じゃない。

だって、この川は底が浅いから潜るのは無理だし、水面に映っていったんだから。

（……………水面に映ってた？）

何か嫌な予感がする。

振り返った後、僕はその子を見つけられなかった。

視界が一瞬隠れた時にいなくなったのだろうか。

（……………一瞬、見えなかった……………た？）

最後に、僕は声を掛けてみた。

でも、喉の調子が悪かった。

喉自体には何の腫れもなく、顎から首の下まで、ずっとしていた。

（……………腫れてない……………）

嫌な予感しかない。

止せば良いのに僕は、再び水面を覗き込んだ。

長い髪をした可愛い感じの女の子がいる。

じっと、僕をみている。

蒼い瞳をした女の子の姿が映っている。

僕は、手を振ってみた。

女の子は手を振り返してくれている。

女の子が見える。

………女の子しか、見えない。

僕の姿がそこには、なかった。

思えば、おかしな所だらけだった。

水面に映るのは女の子だけ。

視界を遮ったのは、短く遮るはずもない僕の髪の毛。  
首には腫れが……喉仏がない。

再び水面を覗き込む。

女の子がじつとこちらを見ている。

水をバシャバシャと水面に映る女の子消す勢いで掻き乱しても、落ち着きを取り戻した水面に僕の姿はない。

つまり、この女の子は……………

「これが……僕？」

僕は、すつと息を吸い込んだ。

「どうなってるの……!?」

女の子の悲鳴が……………僕の絶叫が辺りに響き渡った。

### 第3章：チュートリアル？

「……どうした！？」

そんな声と共に草むらから現れたのは女の人。

フードに隠れて顔全体は分らないが、隙間から覗く口元は厳しく引き締まっている。

手には剣、まるでアニメに出てきそうな真っ直ぐな剣。

僕を背に注意深く周囲を観察している。

「何に襲われた！ どこにいる！」

僕に聞いているんだろうか？

でも、別に僕は襲われたわけじゃないから何がどこにいるという事もないのだけれど……

「……あつ、いえ。別に襲われたわ……や……」

だから、僕の声が小さくなったのも仕方の無い事だと思う。

しかし、それは彼女のお気に召さなかったようだ。

「何だ！！ ハッキリ言え！！」

「勘違いでした！！！」

彼女はこちらを振り返り、僕に確認するように首を傾げてみせる。

僕はゆっくりと首を立てに振る。

「……勘違……い？」

「はい」

「……」

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……そうか……」  
すると、彼女は気が抜けたのかため息をひとつつき、剣を鞘にしまった。

気まずい雰囲気が二人の間に漂う。

「すまない。どうも私の勘違いだったようだな」  
そう言つて、こちらに向き直り彼女は謝罪した。  
「あつ、いえこちらこそ。勘違いさせるような事を言つてすみませんでした」

彼女は照れくささを隠すように、頬を掻きながら僕に言う。  
「ああ……………。ところで、見た感じお前はこの世界に来た所か？」

彼女の独特な言い回しで、彼女がここ以外の世界（多分僕のいる世界？）を知っている事に気付いた。

「ええ。それで、少し気が動転してしまつたみたいです」

「そうか。まあ、そんな雰囲気をかもしだしていたからな。この辺りは雑魚しかいないが、たまに大型の化け物が出る。気を付けろ」  
「大型の、ですか？」

「ああ、私もさつき遭遇したが、取り逃がしてしまつてな。誰か別の人間を襲つてるんじゃないかと思って勘違いした」

「それで、さつきはあんなに慌てていたんですね？」

「……言つな」

ふいつと顔を逸らす彼女の顔が若干赤くなっている。  
照れたのかな？

キツイ印象だったけど、以外とかわいいかもしれない。  
恥ずかしさを振り切るように彼女は森の方を指差し言う。

「ここを抜けると町がある。そこに……」

急に言葉を切る彼女。

次の瞬間、収めた剣を再び抜き放つ。

「ちっ！ 構えろ。何か来るぞ！」

「え？ いや………えっ!？」

「お前もその腰の一物を見る限り戦士系だろう！ さっさとそいつを抜け!!」

腰の………ってああこれか!？

「何をしている!」

「ちよつと、まって!」

僕は腰にある剣に手を掛けて引き抜く。

いや、引き抜こうとした。

「ぬ………ぬけない」

「……なに!？」

後少しで抜けそうなんだけど、僕の手はいつぱいまで伸びきって  
おりこれ以上前に出ない。

「バカやろう!! 反対の手で鞘を引け!!」

鞘？ 鞘って何だ？

ああ、この入れ物？

「ん………あつ、抜けた」

「来るぞ！」

僕が剣を引き抜くと同時に森から、鬼に似た巨体が姿を現す。手には木の棒を持っていて、口からはキバを覗かせている。

……どこかで、見たことあるような？

「ゴブリンか」

「……ああ。そっかゴブリンだ」

よく、デフォルメされたものをゲームやアニメで見ると、現実？で見ると気持ち悪いな。

「……気を抜くなよ？　ゴブリンと言えども油断すれば命を落とすぞ」

「あつ、はい」

これはチュートリアルたぐいの類だろうか？

僕は油断なく構える彼女のマネをして、切っ先をゴブリンに向ける。

「戦闘は初めてか？」

「はい」

「そうか、なら私がやつを引きつけるからその隙に奴に攻撃を加える。いいな？」

「えっ！？」

そう言つて、彼女はゴブリンに向かって行き一撃を加える。

その攻撃はゴブリンの腕をかする程度だったが、ゴブリンは眼を血走らせながら彼女に無茶苦茶な攻撃を仕掛ける。

その全てを難なく回避する様はまるで、彼女の演舞を見ているみた

いだ。

そんな彼女が僕に声をかける。

「おい、何をボケつと見ている！ さっさと攻撃を仕掛ける！」

「……えっ？ あ、はい！」

そうだった。

彼女に見惚れている場合じゃなかった。

僕は気合を入れてゴブリンに向かって行った。

結果。

僕たちは10分ほどで、ゴブリンを倒す事が出来た。

倒れたゴブリンはそのまま消滅して後には何も残らなかった。

戦闘の間は無我夢中でほとんど覚えていなかったが、彼女の

「……戦い方は酷かったけど、初めてにしては良くやった方だろう」

という言葉から、だいたいの推測はつくと思う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8257j/>

---

僕の願いはひとつだけ

2010年10月9日07時49分発行